

語用論の意味と対象領域 —語用論の歴史的展開—

村 越 行 雄

Pragmatics という言葉について考えてみると、1960年代終わり頃あるいは1970年代初め頃から pragmatics を扱った言語学者による論文が現われ始め (pragmatics に関する言語哲学者による論文は、すでにそれ以前に数多く発表されていた)、次第にその数を増し、その後1980年代初めにかけて pragmatics というテーマのもとで執筆された言語学者・言語哲学者の諸論文を集めた P.Cole (ed.). *Syntax and Semantics*. vol.9: *Pragmatics* (1978), J.R.Searle, F.Kiefer, & M.Bierwisch (eds.). *Speech Act Theory and Pragmatics*. (1980), P. Cole (ed.). *Radical Pragmatics*. (1981) などが発行され、そして1980年代に入り、それまで pragmatics における種々様々な問題をそれぞれ個別的に扱うという形で論文・著書が存在していたが、そうした分散して存在していた個別テーマごとの論文・著書をまとめて、pragmatics を包括的に論じた S.C.Levinson. *Pragmatics*. (1983), G.N.Leech. *Principles of Pragmatics*. (1983), G.M.Green. *Pragmatics and Natural Language Understanding*. (1989) という言語学者による著書が現われ出してきたのであり、そうした過程を通して言語学の分野で pragmatics という言葉が使用されてきたと言えるのである。つまり、言語学の分野では、およそ1970年前後から pragmatics に対して関心が向けられ、それにより言語学者そして言語哲学者の共通の研究対象となり、ある意味での両者の共同研究的色合いが出来上がり、そして pragmatics が一つの、独立した研究分野として確立され出してきたと言えるのである。

Pragmatics は、勿論言語学のみならず、言語哲学においても研究の対象となっており、むしろ時代的には言語哲学者の方が言語学者より先に取り組み、しかも言語哲学における諸理論が pragmatics の基礎を成し、また中心的な位置を占めていると言え、更に言語学においては、研究の一分野にすぎない pragmatics が言語哲学では重要で、中心的なものとなっているのであるが、あえて冒頭で言語哲学ではなく、言語学について触れたのは、先に挙げた Levinson (1983), Leech (1983), Green (1989)

で明らかのように、pragmatics 全般を包括的に扱った著書は言語学者によるものであり、また pragmatics の中心的存在となっている P.F. Strawson, J.L. Austin, J.R. Searle, H.P. Grice といった言語哲学者が自ら pragmatics という言葉を使用せず、彼らの理論は pragmatics の領域に属し、しかもその中心を成しているのであるが、むしろ the theory of presupposition, the theory of speech act, the theory of conversational implicature という具合に、彼らの理論の名称をそのまま使用する方が一般的となっているからである。ともかく、理由はなんであれ、pragmatics という言葉は、言語学における pragmatics として取られる傾向が強いように思われる。例えば、英和辞書を見ると、pragmatics を言語学の一分野とし、その訳として語用論を載せている辞書が多いことから明らかであろう。ただ、pragmatic は、pragmatics と哲学の一分野である pragmatism (実用主義) の両方の形容詞であり、混乱を引き起こす言葉であるが、pragmatic の項目には、pragmatism の形容詞と記されて、pragmatics の形容詞とは記されていないことは奇妙に思われるが。

ここまで語用論の代わりに、あえて pragmatics という言葉を使用してきたのは、使用する人により、時代により、また地域により捉え方(定義、対象領域など)が異なっている為で、そうした相違を歴史的に調べていくことが本稿の目的であるが、本題に入る前に、ここで pragmatics という言葉についてごく簡単に触れることにする。言語学者の中には、pragmatics という言葉と区別して、linguistic pragmatics という言葉を使用する研究者(Levinson, 1983)がおり、その場合は、前者が言語を含む記号(sign)一般に関する研究を、後者が言語に関する研究を示すことになるのであるが、ただ一般的には pragmatics という言葉だけが使用され、ある場合には、広義に解釈されて記号一般に関する研究として、またある場合には、狭義に解釈されて言語に関する研究(linguistic pragmatics)として使用されているのが現状である。それは、前者が大陸の用法(the Continental use of the term)で、後者が英米の用法(the Anglo-American use of the term)であるとも言えるかもしれない(Levinson, 1983:5)。ともかく、pragmatics という言葉を広義に解釈する場合は(大陸の用法)、「プラグマティックス」を、狭義に解釈する場合は(英米の用法)つまり linguistic pragmatics としては、「語用論」を使用し、両者を区別することにする。「プラグマティックス」は、例えば、学術雑誌 *Jour-*

nal of Pragmatics、1980年からシリーズとして発行されている *Pragmatics & Beyond* などにもその特徴がはっきりと見られる。

そして、本稿で対象とするのは、アメリカ・イギリスなどの言語学・言語哲学の分野で一般的に用いられている linguistic pragmatics としての pragmatics、つまり「語用論」である。linguistic pragmatics に対して「語用論」という訳を付けるのは、linguistic pragamtics (pragmatics) が the study of language usage (ある特定のコンテクストで、言語が言語使用者によってどのように使用されるかを分析する研究であり、従って「語用論」となる) であるからであり、逆に、記号一般(言語以外のものを含む)を対象にする場合は、「語用論」の領域を超えてしまうので、「プラグマティックス」の領域に属することになる。

I

語用論が出現する過程で、哲学においても、また言語学においても、年代的ずれはあるが、歴史的に統語論(syntax)→意味論(semantics)→語用論(pragmatics)へと研究者の関心が移行していくという同様の過程が見られる。そこで、年代的に先に語用論が現われた哲学から調べることにする。あくまでも語用論の出現に直接関係する範囲内で、その歴史を述べることにする。そして、歴史的流れは、統語論→意味論→語用論という具合に、明確に、しかも単純に移行してきたのでは勿論なく、重複した形で進んだり、また個々のケースでは、年代的に前後入れ替わった形で実際は進んだりしてきたのであるが、全体的な流れを把握しやすくし、それにより歴史的背景を浮き彫りにする為に、極めて単純な叙述をすることを最初に断わっておく必要がある。

20世紀の言語研究において、哲学者が統語論に強い関心を示し、深くかかわった時期があった。それは、論理実証主義(Logical Positivism)の時代で、とくに M.Schlick, O.Neurath, R.Carnap といった論理実証主義者が中心となったウィーン学派(the Vienna Circle: Schlick が創設した1925年から、ドイツ軍がオーストリアに侵入した1938年まで)の時代であった。より厳密に言うと、Martinich(1990:7)によれば、初期 Wittgenstein の *Tractatus Logico-Philosophicus* (1921年) から A.Tarski の “The Concept of Truth in Formalized Languages” (1935年) までとなる。それはともかくとして、1920年代初め頃から1930年代半ば頃までの

時期に、論理実証主義者は、統語論が言語研究の中で占める重要性を強く認識した。そうした傾向を顕著に示したのが Carnap の *The Logical Syntax of Language* (1937:独語の *Logische Syntax der Sprache* はそれ以前に出版されており、英訳されて出版されたのが1937年である)であった。

同じ論理実証主義者である Tarski は、1935年にウィーン学派主催のバリの会合で “The Concept of Truth in Formalized Languages” (独語では1936年に、英語では1956年に出版された)を発表し、その中で意味論の可能性を主張し、他の論理実証主義者に影響を与えた。そして、1944年に “The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics” (英語としては、前者の論文より先に公表された)を出した。そうした Tarski の影響力によって、意味論に対して否定的態度を取っていた Carnap は、自らの関心を意味論に移し、三冊の意味論に関する著書を出版した。*Introduction to Semantics* (1942), *Formalization of Logic* (1943), *Meaning and Necessity* (1946) がそれである。そうした流れの中で、つまり1935年から1940年代において、統語論から意味論への移行が行なわれたのである。その結果、統語論は、ほとんどの哲学者にとって興味を示す対象ではなくなったか、あるいは興味があったとしても、二次的な地位に追いやられてしまったのである。それに代わって、統語論は、しばらくした後に言語学者によって研究されだし、言語学における中心的な地位を得ることになっていった。ここで興味深い点は、ドイツ軍の侵略により、ヨーロッパの著名な論理実証主義者の多くがアメリカに移っていった(例えば、Carnap が1938年にシカゴ大学に、Tarski が1942年にカリフォルニア大学バークレー校に、K.Godel が1940年にプリンストン大学に、H.Feigl が1941年にミネソタ大学に移った。またすでにそれ以前に、Wittgenstein はケンブリッジ大学に移っていた)ことで、上記の統語論から意味論への移行がヨーロッパ大陸ではなく、アメリカで行なわれたということである。

統語論から意味論への移行の過程の中で、あるいは移行が行なわれた後で、統語論と意味論から区別する形で、語用論が現われた。最初にかかわったのが C.Morris “Foundations of the Theory of Signs” (1938) であり、そこで Morris は、記号論 (semiotic) を統語論 (syntactics) と意味論 (semantics) とプラグマティクス (pragmatics) の三つに分類し

た。それに続いて、Carnap は、“Foundations of Logic and Mathematics” (1938)、*Introduction to Semantics* (1942) を出し、定義の相違はあるが、Morris と同様の統語論(syntax)と意味論と語用論(pragmatics)の分類を取り入れた。彼らの結び付きの深さは、アメリカ実用主義(American pragmatism)の成果と論理実証主義の成果を関係づけることを自らの研究目的としていた Morris が教えていたシカゴ大学に、1938年 Carnap が移ってきたことを考えてみても明らかであろう。

ともかく、統語論・意味論・語用論(あるいは、プラグマティックス)の分類が主張され、それによって語用論が出現したのがアメリカ(とくに、シカゴ大学)であったことは注目すべき点であろう。というのは、のちに現われる語用論の中心的な哲学者である Austin と Strawson(論理実証主義者ではなく、分析哲学(Analytic Philosophy)に属し、とくに日常言語哲学(Ordinary Language Philosophy)を支持していたオックスフォード大学のメンバーであった)が共にイギリスのオックスフォード大学で教えていたのであり、更に現在語用論に関して非常に大きな影響力を持っている Searle と Grice(日常言語哲学に属する)が共にアメリカのカリフォルニア大学バークレー校で教えている(Grice は1988年に死去したが)ことを考えると、語用論がアメリカ・イギリスで大きく発展した歴史的経緯が理解できるからである。しかし、まだこの段階では、統語論・意味論・語用論の分類の意義は認められたが、その分類はあくまでも意味論の果たす役割を示す為になされたものと言え、語用論自体の発展は見られず、むしろその後の発展への道を切り開いたとみなすべきであろう。

語用論の実質的な発展の開始は、1950年代からとなる。そして、1960年代、1970年代へと進むにつれて、語用論の研究領域が拡大されていくのである。最初に注目すべき論文は、Carnap の弟子の一人である Y.Bar-Hillel の“Indexical Expressions” (1954)である。その中で、Pragmatics may concern itself with indexical expressions(indexical expressions は、C.S.Peirce が初めて indexical signs と呼んだものからきている)と主張した。つまり、語用論とは、指標表現(indexical expressions:あるいは、indexicals、指標詞:例えば、I, you, this, here, now)にかかわる研究領域であると主張したのである。その指標表現とは、最も狭義に解釈される語用論であると言われているものである。その意味で、

語用論=指標表現研究という具合に、指標表現研究が語用論における最小限度の領域であるとし、その後その領域が拡大されていったと考えるとすれば、Bar-Hillel の論文が出発点であると言えるかもしれない。ただ、年代的に見れば、哲学における重要な課題の一つである指示 (reference: 指標表現も指示に関連するものである)ので、ここでは指示一般と言ったほうがよかろうか)そのものに関する研究は、それ以前にすでに行なわれていたのであるから、歴史的には指示の研究の方が指標表現の研究よりも先に位置し、従って前者が出発点になると言えるのであるが。指示研究に関しては、近代言語哲学の先駆者として見られている G.Frege の “On Sense and Reference” (独語、1892:英語、1952)がまず挙げられる。そこで、言語学者・哲学者に非常に強い影響力を及ぼすことになった sense と reference の区別を Frege は行なった。次に、B.Russell の “On Denoting” (1905)を批判した Strawson の “On Referring” (1950)が挙げられる。そして、Frege と Strawson は、語用論における重要なテーマの一つである前提 (presupposition) に関する研究を行なった哲学者でもある。指示に関しては、意味論的指示 (semantic reference) と話し手の指示 (speaker's reference) について論じた K.Donnellan の “Reference and Definite Descriptions” (1966) と S.Kripke の “Speaker's Reference and Semantic Reference” (1977) を挙げておく必要がある。また、指示ではないが、話し手の意味 (speaker's meaning) に関する Grice の “Meaning” (1957) も挙げておく必要がある。

更に、Austin の *How to Do Things with Words* (1962:1955年のハーバード大学での the William James Lectures をもとにしたもの)で、語用論における最も重要な理論とみなされている言語行為論 (the theory of speech act: 日本においては、英語学者と哲学者の間で訳の食違いが見られる。哲学の文献では、speech act が言語行為に、linguistic act が言語的行為に、utterance act が発話行為に、locutionary act が発語行為に訳されるのに対して、英語学の文献では、speech act が発話行為に、linguistic act が言語行為に、utterance act が発語行為/発話行為に、locutionary act が発言行為/発語行為に訳されており、従って the theory of speech act は、言語行為論と訳されたり、発話行為理論と訳されたりする。)が展開され、それに続いて、部分的な変更をしながらも、Austin の言語行為論を継承した Searle が *Speech Acts* (1969) を出版し、

その理論を発展させた。そして、Austin と Searle の言語行為論は、理論的価値においても、影響力においても、また貢献度においても、言語哲学・語用論における最も高く評価されている理論であると言えるであろう。それと並んで、言語行為論と同じように高く評価されている(言語学者の間の方が高い評価を受けているようであるが)のが Grice の “Logic and Conversation” (1975)、“Further Notes on Logic and Conversation” (1978) (両論文は、1967年のハーバード大学での the William James Lectures で発表されたものの一部である)で展開されている会話含意理論(the theory of conversational implicature)である。

Morris、続いて Carnap による統語論・意味論・語用論の区別から始まり、その後の歴史の変遷の中で、語用論の対象領域が拡大されてきたのであるが、最も狭義に解釈すれば、指標表現だけとなり、また広義に解釈すれば、上記の全てが含まれることになる。そして、言語哲学者、とくに日常言語哲学者は、言語使用の研究に関係するもの全てを語用論の研究領域に含める傾向があるように思われ、その意味で、言語学者が考えている研究領域とは食い違うことになる。しかし、語用論の定義、研究領域の線引等の問題は別にして、基本的には、指標表現、前提、言語行為、そして会話含意は、語用論の領域で扱われなければならない課題であると言えよう。

言語学の分野では、どうであろうか。ここでは、あくまでも語用論との関係から簡単に述べることにする。

最初に挙げなければならないのは、N.Chomsky である。アメリカ言語学者の Chomsky が *Syntactic Structures* (1957) を出版し、統語論の研究が言語研究の中核を成すことを主張して以来、他の言語学者に大きな影響力を及ぼした。つまり、1950年代後半以降、統語論の研究が持つ重要性に目が向けられた。そして、1960年代初め頃から意味論に関心が向けられ、J.J.Katz & J.A.Fodor, “The Structure of a Semantic Theory” (1963)、Katz & P.M.Postal, *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions* (1964) などが現われた。その後、1960年代終わり頃あるいは1970年代初め頃には、とくに生成意味論者(generative semanticists)は、すでに言語哲学の分野で行なわれていた言語使用に関する研究に注目し始めていた。その結果が G.Lakoff, “On Generative Semantics” (1971)、J.R.Ross, “On Declarative Sentences” (1970) である。更に、1970年代

半ば頃からその傾向が強まっていった(Griceの“Logic and Conversation”(1975)の影響を受けて)。そうした過程の中で、言語学者は意味論から語用論を区別し、言語哲学における語用論に関する研究成果を取り入れ、それを自らの言語研究に活用していった。以上の事を図式的に言えば、哲学における統語論→意味論→語用論という流れと言語学における統語論→意味論→語用論という流れが1970年前後を境にして語用論で合流し、それが現在に至るということになる。そして、語用論の対象領域は、言語学者のD.Sperber & D.Wilsonの*Relevance*(1986)で示された関連性理論(the theory of relevance:Griceの会話含意理論・会話理論に対する批判を通して生まれたもの)を含めるとすれば、更に拡大することになるであろう。

言語学に対する言語哲学の影響は、Levinson(1983:36)によれば、Austin, Strawson, Grice, Searleが主で、1960年代終わり頃、生成意味論として知られている動きの中で、語用論に関するCarnapの定義を取り入れたことから始まるとしており(Levinson自身が示したAustin, Strawson, Grice, Searleという順番は、年代順ではないので、Austinの言語行為論(1962)、Strawsonの前提理論(1950)、Griceの会話含意理論(1975)、Searleの言語行為論(1969)の順番で言語学の領域に入ってきたという意味なのであろうか。また、前提が1969-1976年の間に言語理論の中心的領域になったとしている点も興味深いと言える)、Leech(1983:2)によれば、1960年代終わり頃に、RossとLakoffが語用論の意義を主張し、継続的に影響を及ぼしたのは、Austin(1962)、Searle(1969)、Grice(1975)(このLeechが示した順番は、年代順であろう)であるとし、またJ.L.Morgan(1978:264)によれば、1970年代前半は、語用論の研究がもっぱら指標表現の分析に向けられていたが、1978年頃になってGriceの会話含意をも対象とし、拡大してきたとしており、具体的にいつ、どのように、どのような順番で行なわれたのかは、断定できない。勿論、断定すること自体無理な話であろうが、ただ言えることは、1970年前後を境にしてかなり短い期間の間に、様々な言語哲学の研究成果が取り入れられた訳であるから、ほぼ同時的に入ってきたと考える方が妥当であろうが、指標表現と前提は、直接言語学者にかかわりのある問題であったという意味で、先に取り入れられ、次に当時大きな影響力を持っていた言語行為論がほぼ同時か、あるいはすぐ後に取り入れられ、その後に会話

含意が取り入れられたと想像することも可能であろう。ともかく、1970年代は、言語哲学の研究成果を取り入れる時期で、1980年代頃からは、言語学者がそれらの成果を利用しながら、自らの方法で発展させていったと言えよう。

そして、1970年代は、それ以前には言語学者の研究と言語哲学者の研究が釣り合うことなど無理であると思われていたことが現実になったことを実証した時期であった(Cole & Morgan(eds.).*Syntax and Semantics*.vol.3:*Speech Acts* (1975)の序文)。

II

語用論の定義・研究領域について、少し具体的に調べてみることにする。

現在では一般的に受け入れられている統語論・意味論・語用論の分類は、最初 Morris(1938、1946)によって、それに続いて Carnap(1938、1942)によって行なわれたとされている。しかし、実用主義者であるアメリカ哲学者の C.S.Peirce(1839-1914)との関係(Peirce の分類と Morris の分類の関係、pragmatism と pragmatics の関係など)は、必ずしも明確になっていない(Levinson, 1983:1)。ただ、Peirce による記号論(semiotic)の pure grammar (the inquiry into the necessary conditions of mean-ingfulness of propositions)、logic proper (the study of the necessary conditions of truth)、pure rhetoric (the study of laws by which in every scientific intelligence one sign gives birth to another, and especially one thought brings forth another)への分類を Morris が借り入れ、それを記号論(semiotic)における統語論(syntactics)・意味論(semantic)・語用論(pragmatics)という分類に置き換え、それを Carnap が利用したとも考えられる(F.Zabeeh, E.D.Klemke & A.Jacobson、1974:17)。その評価に関しては、ここでは扱わないことにして、Morris と Carnap から始めることにする。

Morris によれば、記号論は、次のような三部構成から成立する(1938:6)。

統語論-“the formal relation of signs to one another”の研究

意味論-“the relations of signs to the objects to which the signs are applicable”の研究

語用論-“the relation of signs to interpreters”の研究

しかし、Morris は、上記の定義では意味論と語用論の区別が曖昧で、語用論が意味論の一部分であるかのような印象を与えるとして、後に語用論を再び定義しなおした(1946)。

語用論-“that branch of semiotics which studies the origins, the uses, and the effects of signs”

このように the origins, the uses, and the effects of signs の研究と定義された語用論の研究領域は、言語あるいは記号一般にかかわる心理学的、社会学的な現象全ての研究を含むことになり、極めて広いものであった。その意味で、序文で述べたように、Morris の pragmatics は、「語用論」ではなく、「プラグマティックス」であると言え、Levinson(1983:2)によれば、pragmatics の大陸的用法ということになる。それに対して、Carnap(1938、1942)は、Morris(1938)に従いながらも、言語に限定し、その研究領域を Morris より狭めた。彼にとっての pragmatics は、まさに「語用論」であって、その意味で、現在の語用論は、Carnap からの流れであると言える。そして、Levinson(1983:5)の言う英米的用法の元を成すものである。Carnap(1942:9)の定義は、次の通りである。

If in an investigation explicit reference is made to the speaker, or, to put it in more general terms, to the user of the language, then we assign it to the field of pragmatics...If we abstract from the user of the language and analyze only the expressions and their designata, we are in the field of semantics.And if, finally, we abstract from the designata also and analyze only the relations between the expressions, we are in (logical) syntax.The whole science of language, consisting of the three parts mentioned, is called “semiotics” .

このような an investigation making explicit reference to the user of the language という語用論の定義は、その後の研究者に非常に大きな影響を及ぼした。その代表的な例の一つが、Carnap の弟子の一人である Bar-Hillel の “Indexical Expressions” (1954)であった(Carnap(1942)の語用論の定義から単純に直接取り入れたというより、Carnap 哲学か

らの延長線上にあると取るべきである。というのは、Carnap は *The Logical Syntax of Language* (1937) ですでに指標表現について触れていたからである。ただ、当時統語論に関心を向けていた Carnap にとっては、統語論から排除すべきものとして触れたにすぎなかったが、Bar-Hillel は、その指標表現を語用論の領域に入れた。そこで、語用論が指標表現（あるいは、指標表現を含む言語）の研究であると定義された。つまり、語用論=指標表現研究となり、Morris → Carnap → Bar-Hillel へと進むにつれて、語用論の研究領域が狭められ、Bar-Hillel において最小限度に狭められた研究領域になったのである。

そして、そのような定義は、形式哲学者あるいは形式意味論者 (formal philosopher、formal semantist) によって受け継がれていった。例えば、R.Montague, “Pragmatics” (1968)、“Pragmatics and Intensional Logic” (1970)、D.Lewis, “General Semantics” (1972)、M.Cresswell, *Logic and Languages* (1973)、また R.Stalnaker, “Pragmatics” (1972) などがある。しかし、Montague、Lewis、Cresswell (Stalnaker は含まれない) にとっての語用論は、実際は意味論であった、つまり指標表現を含む言語に関する形式意味論にすぎなかったとする哲学者もいる (例えば、R.Bertolet, *What Is Said* (1990:14))。

そうした主張が出される理由は、Bar-Hillel (1954) が日常的に使用される平叙文の90%以上に I, you, this, here, now, yesterday などの指標表現が含まれており、指標表現と言語は切り離すことのできないものであると述べたことでも明らかのように、指標表現抜きには言語が語れないほど、言語に本来備わっているものであるという事実に対して、従って意味論の対象であるとするべきか、あるいは逆に、従って全て語用論の対象である (指標表現は、本来言語表現とそれが発話されるコンテキストの関係にかかわるものであるから) と取るべきかに別れるからである。そうした理由で、Bar-Hillel は指標表現研究=語用論という結論に達したのであり、また反対に、指標表現研究を意味論の一部であるとする言語学者もいた (例えば、R.M.Kempson, *Presupposition and the Delimitation of Semantics* (1975) など) のである。

以上のような語用論の研究領域の縮小傾向に対して、拡大傾向があった。それは Austin と Searle の言語行為論であり、Grice の会話含意理論であった。彼らは、前述のように、自らを語用論者とは呼ばず、言語哲

学、その内の日常言語哲学の領域で自らの理論を打ち立てていった。そして、語用論の定義自体に興味を示したとは言えないが、ただ彼らの対象は、言語使用の研究であったし、具体的には、会話における言語コミュニケーションの研究、従って話し手、聞き手、その他の諸条件を含む、言語が使用されるコンテキストの分析であった(Austin・SearleとGriceの間には、相違があった。話し手-言語-聞き手という関係から見ると、Austin・Searleの場合、話し手と言語の関係に力点が置かれ、話し手の視点から、話し手がどのような言語行為を遂行するかが中心になり、Griceの場合、聞き手と言語の関係に力点が置かれ、聞き手側の立場から、聞き手が話し手の発話を推論によってどのように解釈するかが中心となっていたと思われる)と言えるので、それを語用論の定義であると取れば、Carnapの定義とは異なり、またBar-Hillelの定義と比べれば、勿論より広義に解釈されたものであったと言える。ともかく、言語行為論そして会話含意理論の出現により、哲学者そして言語学者は大きな影響を受け、それらを取り入れることによって語用論の研究領域を広げていった。

先に挙げたStalnaker(1972)は、指標表現のみならず、言語行為をも語用論の研究領域に入れた。語用論をthe study of language in relation to the users of languageと定義した上で、彼は次のように言う。

Syntax studies sentences, semantics studies proposition. Pragmatics is the study of linguistic acts and the contexts in which they are performed. There are two major types of problems to be solved within pragmatics: first, to define interesting types of speech acts and speech products; second, to characterize the features of the speech context which help determine which proposition is expressed by a given sentence. The analysis of illocutionary acts is an example of a problem of the first kind; the study of indexical expressions is an example of the second. My primary concern will be with the second kind...

このようなStalnakerを、Searle et al.(1980)はCarnap-Bar-Hillel-Montague-Lewis-Cresswellの流れの中に入れ、それに対して、D.Blake-

more(*Semantic Constraints on Relevance*, 1987:2)は、K.Bach & R.M. Harnish(*Linguistic Communication and Speech Acts*, 1979)、Levinson(1983)と同様に、言語行為論を語用論の中核とする研究者としている。指標表現と言語行為のどちらに重点を置いているかを判断することは、そう簡単なことではなく、両者ともに重点を置いていると言えるであろうが、強いて言えば、前者であろう。それはともかくとして、そうした問題は、些細な事のように思われるであろうが、語用論の研究領域に何を入れるかは、それぞれの研究者によって異なり、その研究者の分析視点、理論的影響、時代的制約などの特徴を知る上で、大事なことになるのである。

例えば、Carnapの流れを汲むBar-Hillel-Montague-Lewis-Cresswellの指標表現、Frege-Strawsonの前提、Austin-Searleの言語行為、Griceの会話含意などは、継続的なつながりを持って、現われてきたのではなく、それぞれが個別的に、独立した形で現われてきたのであり、その内のどれを取り入れ、どれに重点を置くかによって語用論の捉え方・研究領域の範囲が異なってくるのである(具体的な例として、以上の四つ全てを取り入れ、更に会話構造を加えたLevinson(1983)は、語用論を網羅的に論じているが、しかし同様に重要と思われるSperber & Wilson(1986)の関連性理論を含めておらず、時代的制約を受けたのである)。そうしたことを考慮しながら考えると、大別して、言語行為論を中心に据えた語用論と会話含意理論(ある意味で、その流れを汲む関連性理論)を中心に据えた語用論が現在主流であるように思われ、前者には言語哲学者が、後者には言語学者が属する傾向があるようにも感じられる(勿論、独断的すぎる見方かもしれない)。前者では、行為が中心概念で、行動理論の一部として、後者では、発話解釈あるいは発話解釈に伴う推論が中心概念で、心理学的理論の一部として(Sperber & Wilson(1986:10)は、語用論を発話解釈の研究と定義付け、関連性理論を支持するBlake-more(1987:1)は、語用論を発話解釈に関する心理学的理論であるとしている)考えられているが、両者は、取り上げ方は異なるが、同様の研究テーマを対象にしているという意味で、相互に結び付く可能性を十分持っていると言える。

III

語用論の中核を成す理論が何であるかは、語用論の捉え方(時代的制約、研究者個人の理論的立場、言語哲学と言語学の相違など)によって左右されるが、言語行為論そして会話含意理論がその中核を成す理論であることに、異議はないであろう。というのは、指標表現、指示、前提などは、研究者によっては、意味論的視点から分析されたり、また語用論的視点から分析されたりしており、語用論と意味論の両領域にまたがっている(言語構造との結び付きが他のものと比べて強い為)と見られるが、言語行為論と会話含意理論が語用論の領域に属することは、一般的に認められている(言語以外の諸要素の果たす役割が極めて強い為)。ただ、言語行為論は、言語構造との結び付きがかなりあるので、意味論的視点からの分析を試みる研究者もいるが)からである。そこで、問題となるのは、語用論の定義に際して、意味論と語用論の両領域の境をどこで線を引くかである。意味論を意味の研究であり、語用論を言語使用の研究であるとする定義は、基本的には正しいが、単純すぎて、曖昧な点が多く残る。では、具体的にはどのような基準で区別されるのであろうか。例えば、文の意味(sentence-meaning)と話し手の意味(speaker-meaning)の区別、文字通りの意味(literal meaning)と発話の意味(utterance meaning)の区別、文(sentence)と発話(utterance)の区別、コンテキスト欠如(context-free)とコンテキスト依存的(context-dependent)の区別、真理条件的(truth-conditional)と非真理条件的(non-truth-conditional)の区別などの基準で、あるいはそれらの組合せで、意味論と語用論を区別することはできる。しかし、Levinson(1983: 5-35)の言うように、両領域の境を厳密にどこで線を引くか、つまり語用論をどのように明確に定義するかは、簡単には解決できない問題である。ただ、語用論の領域で何を扱うべきかは、前述したように、ある程度明らかになっているが。

意味論と語用論は、本来ともに意味に関するものである。そこで、意味の研究が意味論的視点から行なわれるのか、それとも語用論的視点から行なわれるのかという問題が生じてくる。それは、単純ではあるが、一般的に受け入れられている What does a sentence mean?(文の意味、文の文字通りの意味)と What does a speaker mean by uttering a sentence?(話し手の意味、発話の意味)の間における意味の相違(つま

り、食い違い)をどのように説明するかという問題から来ている。もし、両者の意味がいつも必ず同一であるならば、問題は起きず、意味の研究は全て意味論の領域内にあると言えるかもしれない。ところが、現実の日常的な会話では、様々な形で食い違いが起きる。例えば、話し手が文の意味以上のことを意味する場合(間接的言語行為)とか、文の意味とは異なることを意味する場合(比喩)とか、文の意味とは反対のことを意味する場合(皮肉)などがある。具体例を挙げれば、話し手が *It's really hot here* という文を発話することによって「窓を開けてくれませんか」を意味する場合がそうである(ここでは、話しを複雑にしない為に、文だけに限定するが、もし指標表現を例にとりて言えば、*I'll meet you there tomorrow* という文を発話する場合、ある話し手が *tomorrow* によって8月1日を、*there* によって新宿駅前を指し、またある話し手が別の時と場所を指すように、具体的な時と場所が変わる)。そして、そうした文の意味と話し手の意味の食い違いを論じたのが Grice であった。“Meaning” (1957)、“Utterer's Meaning, Sentence-Meaning, and Word-Meaning” (1968)がそれである。

会話で話し手がある文を発話する時、それが文の意味=話し手の意味であれ、文の意味≠話し手の意味であれ、少なくとも食い違いが起きる場合がある以上、意味の研究において文の意味と話し手の意味を区別して考えていく必要がある。その為に、次のことをはっきりさせておかなければならない。まず最初に、(1-a)文が発話されるコンテキストから切り離された、純粋に言語的に決定される文の意味と(1-b)文が実際に発話されるコンテキストによって決定される話し手による発話の意味として、言い方を変えれば、(1-a)実際の言語使用以前の、純粋に言語自体を対象にする段階での文の意味と(1-b)実際の言語使用の段階つまりコミュニケーションの段階での聞き手に伝達する意図を持ってなされる話し手の発話の意味として区別できる。次に、実際の言語使用の段階で、(2-a)文の意味=話し手の意味と(2-b)文の意味≠話し手の意味として区別できる。以上の(1)と(2)は、しばしば混同され、混乱を引き起こすことがあるので、明確にその相違を認識しておく必要がある。

例えば、意味論と語用論の関係について、前者を後者の一部であるとする考え、逆に後者を前者の一部であるとする考え、更に両者をそれぞれ独立した、相異なる領域であるとする考えの三つが可能であるが、最

初の二つは、(1)と(2)の混同から生じる場合がある。Searle et al. (1980: x-xi)において、語用論の捉え方には、少なくとも三つあり、それぞれが形式哲学、言語的意味論、日常言語哲学と関連し、意味論と語用論の関係に対して異なる考えを生み出しているとしている。その中で、Katz (1977)は、指標表現と言語行為の分析が一部は意味論に、また一部は語用論に属するとし、発話において、文の文字通りの意味によって表せる直接言語行為が意味論に、文の文字通りの意味とは食い違う話し手の意味によって表せる間接言語行為が語用論に含まれるとし、結局語用論が意味論の一部であるとしている。それに対して、Austin、Grice、Searleは、実際の発話においては、文の文字通りの意味もコンテキストから切り離すことはできないので、従って話し手の意味と同様、コンテキストに依存しており、その意味から言えば、意味論と語用論をはっきり区別できず、結局意味論が語用論の一部になるとしている。そして、Leech (1983:6-7)においても、同様に、Searle (1969)が意味論を語用論の一部に組み入れ、それに対して、Ross (1970)が語用論を意味論の一部に組み入れているとされているが、その理由は、必ずしも明確ではない。それはともかくとして、Searle et al. (1980)とLeech (1983)に共通して言えることは、意味論を語用論の一部に組み入れる考えは言語哲学者の間で見られる傾向が強く、語用論を意味論の一部に組み入れる考えは言語学者の間で見られる傾向が強いという点である。

Searle et al. (1980)とLeech (1983)で示された主張の根拠の正当性は別にして、少なくとも(1)と(2)の混同があるように思われる。もし(2)だけを対象にすれば、(2-a)文の意味=話し手の意味であれ、(2-b)文の意味≠話し手の意味であれ、実際に言語が使用される状況を問題にしている以上、話し手による発話は、たとえ何であれ、その発話されるコンテキストに依存するのであるから、意味論を語用論の一部に組み入れようとするのも当然であろう。例えば、It's really hot here という文を発話する場合、話し手がそれによって「ここは、本当に暑いね」を意味するにしても、また「窓を開けてくれませんか」を意味するにしても、発話されるコンテキストに依存していることには変わりないのである。それに対して、もし(1-a)と(2)を、とくに(1-a)(2-a)を対象にすると、文の意味(つまり言語構造によって決定される意味)の意味全体において果たす役割が非常に強くなる為、語用論を意味論の一部に組み入れようとする

るのも当然のこととなる。とすれば、そうした混同・混乱を避ける為に、まず(1)と(2)を分けて考え、(1)においては、(1-a)意味論と(1-b)語用論が相異なる、互いに独立した領域となり、それを踏まえて、(2)において、実際の発話で文の意味が(2-a)と(2-b)とでは占める位置が異なってくることを分析するとすべきである。それにより、(2)は語用論の領域であるが、そこになぜ意味論的要素が入り込んでくるのかが明らかになるであろう。

IV

語用論の歴史的展開を調べてきたが、最後に、歴史全体の流れから簡単に見てみることにする。哲学の分野では、ドイツ観念論に反発する形で論理実証主義そして日常言語哲学が生まれ、語用論的理論が誕生・発展・拡大してきたとされており、また言語学の分野では、Chomsky に反発する形で生成意味論者が哲学の語用論的理論を取り入れ、それを発展・拡大させてきたとされているが、それはまた時代の要請でもあった。語用論の実質的な発展が第二次世界大戦以降に見られることから明らかである。大戦以降、政治体制の変化に伴い、経済、科学などが飛躍的に発展し、現実社会の日常的な側面に目が向けられ、その重要性が広く認識されてきた。そうした時代の流れの中で(人々の日常生活の改善・充実、個人の権利・存在意義の評価、人々の間での意志疎通の重要性、外国との交流・協力関係の拡大など)、言語に対する意識が、一般の人であれ、研究者であれ、日々の日常的な会話で使われている話し言葉に、コミュニケーションの手段としての話し言葉に向けられていった。それは、現実に即した理論、つまり言語コミュニケーション理論の確立を求める要因でもあった。とくに、Austin と Searle の言語行為論に見られるように、話し手という人間が理論という舞台の主演になり、しかも言語が単に話したり、聞いたりする言葉としてではなく、人間の行動として捉えられ、正に個人という主体の行動が理論の中心となったのである。そして、時代は、更に緊密な人間同志のコミュニケーションを必要としており、それはまたコミュニケーション理論の発展・充実を意味している。以上のような意味から言えば、言語コミュニケーション理論としての語用論は、今後も充実していくであろうし、中核を成すような理論が今後も出現してくるであろう。

[参考文献]

- Austin, J.L. (1962). *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.
- Austin, J.L. (1970). *Philosophical Papers*. Oxford: Oxford University Press.
- Bach, K & Harnish, R.M. (1979). *Linguistic Communication and Speech Acts*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Bar-Hillel, Y. (1954). "Indexical Expressions" . *Mind*, 63, 359-79.
- Bertolet, R. (1990). *What Is Said*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Blakemore, D. (1987). *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Carnap, R. (1937). *The Logical Syntax of Language*. London: Kegan Paul.
- Carnap, R. (1938). "Foundations of Logic and Mathematics" . In O.Neurath, R.Carnap & C.W.Morris (eds.) *International Encyclopedia of Unified Science*, 1, 139-214. Chicago: University of Chicago Press.
- Carnap, R. (1942). *Introduction to Semantics*. Cambridge Mass.: MIT Press.
- Carnap, R. (1946). *Meaning and Necessity*. Chicago: University of Chicago Press.
- Chomsky, N. (1957). *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Cole, P. (ed.) (1978). *Syntax and Semantics vol.9: Pragmatics*. New York: Academic Press.
- Cole, P. (ed.) (1981). *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press.
- Cole, P. & Morgan, J.L. (eds.) (1975). *Syntax and Semantics vol.3: Speech Acts*. New York : Academic Press.
- Cresswell, M. (1973). *Logic and Languages*. London: Methuen.
- Davis, S. (ed.) (1991). *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Donnellan, K.S. (1966). "Reference and Definite Descriptions" . *Philosophical Review*, 75, 281-304.
- Donnellan, K.S. (1978). "Speaker Reference, Descriptions and Anaphora" . In Cole (1978:47-68).
- Frege, G. (1952). "On Sense and Reference" . In P.T.Geach & M.Black (eds.) *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege*. Oxford: Blackwell, 56-78.
- Green, G.M. (1989). *Pragmatics and Natural Language Understanding*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Grice, H.P. (1957). "Meaning" . *Philosophical Review*, 67. (Reprinted in Strawson (1971:39-48)).
- Grice, H.P. (1968). "Utterer's Meaning, Sentence-Meaning, and Word-Meaning" . *Foundations of Language*, 4, 1-18. (Reprinted in Searle (1971:54-70)).
- Grice, H.P. (1975). "Logic and Conversation" . In Cole & Morgan (1975: 41-58).

- Grice, H.P. (1978). "Further Notes on Logic and Conversation" . In Cole (1978:113-28).
- Grice, H.P. (1981). "Presupposition and Conversational Implicature" . In Cole (1981:183-98).
- Katz, J.J. (1977). *Propositional Structure and Illocutionary Force*. New York: Crowell and Co.
- Katz, J.J. & Fodor, J.A. (1963). "The Structure of a Semantic Theory" . *Language*, 39, 170-210.
- Katz, J.J. & Postal, P.M. (1964). *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kempson, R.M. (1975). *Presupposition and the Delimitation of Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kripke, S. (1977). "Speaker's Reference and Semantic Reference" . *Midwest Studies in Philosophy*, 2, 255-76.
- Lakoff, G. (1971). "On Generative Semantics" . In Steinberg & Jakobovits (1971:232-96)
- Leech, G.N. (1983). *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Levinson, S.C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lewis, D. (1972). "General Semantics" . In D. Davidson & G. Harman (eds.) *Semantics of Natural Language*. Dordrecht: Reidel, 169-218.
- Lyons, J. (1977). *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Martinich, A.P. (ed.) (1985). *The Philosophy of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Montague, R. (1968). "Pragmatics" . In R. Klibansky (ed.) *Contemporary Philosophy*. Florence: La Nuova Italia Editrice, 102-21.
- Montague, R. (1970). "Pragmatics and Intensional Logic" . *Synthese*, 22, 68-94.
- Morgan, J.L. (1978). "Two Types of Convention in Indirect Speech Acts" . In Cole (1978:261-80).
- Morris, C.W. (1938). "Foundations of the Theory of Signs" . In O. Neurath, R. Carnap & C.W. Morris (eds.) *International Encyclopedia of Unified Science*, 77-138.
- Morris, C.W. (1946). *Signs, Language and Behavior*. New York: Prentice Hall.
- Ross, J.R. (1970). "On Declarative Sentences" . In Jacobs, R.A. & Rosenbaum, P.S. (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. Waltham, Mass.: Blaisdell, 222-72.
- Russell, B. (1905). "On Denoting" . *Mind*, 14, 479-93.
- Russell, B. (1957). "Mr. Strawson on Referring" . *Mind*, 66, 385-9.
- Searle, J.R. (1969). *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J.R. (ed.) (1971). *Philosophy of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Searle, J.R. (1975). "Indirect Speech Acts" . In Cole & Morgan (1975:59-82).

- Searle, J.R. (1976). "The Classification of Illocutionary Acts" . *Language in Society*, 5, 1-24. (Reprinted in Searle (1979:1-29)).
- Searle, J.R. (1979). *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J.R., Kiefer, F. & Bierwisch, M. (1980). *Speech Act Theory and Pragmatics*. Synthese Language Library, vol.10. Dordrecht, Holland: Reidel.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986). *Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Stalnaker, R. (1972). "Pragmatics" . In D. Davidson & G. Harman (eds.) *Semantics of Natural Language*. Dordrecht: Reidel, 380-97.
- Steinberg, D.D. & Jakobovits, L.A. (eds.) (1971). *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Strawson, P.F. (1950). "On Referring" . *Mind*, 59, 320-44.
- Strawson, P.F. (1964). "Intention and Convention in Speech Acts" . *Philosophical Review*, 73, 439-60. (Reprinted in Searle (1971:23-38)).
- Strawson, P.F. (1964). "Identifying Reference and Truth Values" . *Theoria*, 30, 96-118.
- Strawson, P.F. (ed.) (1971). *Philosophical Logic*. Oxford: Oxford University Press.
- Tarski, A. (1935). "The Concept of Truth in Formalized Languages" . English translation in Tarski (1956).
- Tarski, A. (1944). "The Semantic Conception of Truth" . *Philosophy and Phenomenological Research*, 4, 341-75. (Reprinted in Tarski (1956)).
- Tarski, A. (1956). *Logic, Semantics and Metamathematics*. London: Oxford University Press.
- Wittgenstein, L. (1921). *Tractatus Logico-Philosophicus*. (Reprinted and translated as Wittgenstein (1961)).
- Wittgenstein, L. (1958). *Philosophical Investigations*. Oxford: Blackwell.
- Wittgenstein, L. (1961). *Tractatus Logico-Philosophicus*. Translated by D.F. Pears & B.F. McGuinness. London: Routledge & Kegan Paul.
- Zabeeh, F., Klemke, E.D. & Jacobson, A. (eds.) (1974). *Readings in Semantics*. Urbana: University of Illinois Press.